

千鳥ヶ池

千鳥ヶ池（古賀市舞の里2丁目5番）は古賀市の北西部に位置する自然池（湧水池）で、池にまつわる多くの伝説と天然記念物ツクシオオカヤツリグサの自生地として知られています。江戸時代中期の『筑前国続風土記』（貝原益軒編著）には、「池の広さ、南北二百間（約360m）、東西広き所五十間（約90m）せはき所三十間（約54m）、其の深き事七尋（約12.6m）あり」とされた大池でしたが、護岸工事により現在は周囲約1kmの池になりました。付近は近年、渡り鳥の飛来が見られる都市型公園として整備され、市民の憩いの場所として親しまれています。さらに隣接する千鳥小学校、古賀北中学校の総合的な学習の対象としてもおおいに活用されています。

《参考資料》

千鳥ヶ池は千鳥池と『福岡県地理全誌』（二十四 久保村の内）明治5（1873）年編集』にみえています。

村ノ北八町許、花見山ノ東ニアリ。天然池ナリ。里人ノ傳ニ此沼ノ邊ニ古ヘ人家アリ。〔千鳥町ナルベシ〕千鳥ト云女子蛇体ニ化シ忽深キ泉水出タリト云。其後此沼ヘ身ヲ投テ死ント思ヒテ来ル者アレドモ志ヲ遂ルモノナシ。太郎丸ニ観音堂アリ。其本尊〔長五尺許〕モ此池ヨリ出タリト云。倉田半兵衛ト云者見出シ太郎丸ニ安置セシカ。今ハナシ。近年マテハ池ノ廣サ南北二百間東西五十間深サ七尋。水面三町五反餘アリシカ。嘉永五六両年ノ旱魃ニ雨ヲ祈リ沼ヲ埋メシヨリ水面減シ今ハ二町五反歩トナル。田地二町歩ニ漑ク。蓮根ヲ多ク植タリ。鯉鮒鯰等多ケレドモ水涸サル故捕得カタシ。

《伝説》

いつの頃か、この池のほとりに伝吉と千鳥という仲の良い若夫婦が住んでいました。千鳥は美人の評判が高く、村の人たちの羨むところでしたが、なぜか伝吉が外から帰ってくる時には、必ず「エヘン」と咳払いしてから表の戸を開けるようにと強くいわれていました。何か理由があるに違いないと感じた伝吉は、ある日そっと戸をあけて入り、奥の千鳥の部屋をのぞいたところ、千鳥に代わって火のような赤い舌をべろべろと出し体をくねらせて身を繕う大蛇をみてしまいました。千鳥に気づかれてはならないと平静を装った伝吉でしたが、心の動揺は隠し切れず、自分の秘密を知られたことを感じた千鳥は悲しさのあまり大蛇となって屋根を突き破り、家の前の池に身を沈めてしまいました。その後大蛇となった千鳥はこの千鳥ヶ池の主となったといわれています。



▲ 千鳥ヶ池



*千鳥ヶ池は干上がることがない池として古くから言い伝えられてきました。それが早魃時には雨乞いの神事と結びつき、昭和53（1978）年6月3日には時間給水が続いている福岡市の櫛田神社が、市民の願いを受け、同神社に伝わる社宝の「虎の頭の骨」を千鳥ヶ池に浸すと大雨が降るという故事にならって『虎頭雨乞いの儀』を厳かに行いました。

「広報こがまち」昭和53年7月号より

ツクシオオカヤツリは、カヤツリグサ科の多年草で、原産地は熱帯アジア地方といわれています。

明治39（1906）年9月1日世界で初めて福岡城の濠で発見され、昭和32（1957）年県の天然記念物に指定されました。花期は7～8月、花序は大きく2段になったかさ形、花序の枝も多く5～12本、長いのは25cmにもなります。開花時は緑色、熟して褐色になります。本種は国内では福岡県のみ産し、福岡市内の自然池等に数ヶ所自生が確認されています。古賀市では昭和54（1979）年11月4日（当時は古賀町）永田知恵子氏によって千鳥ヶ池で発見されて以来、貴重な北限自生地となっています。

県指定天然記念物 ツクシオオカヤツリ

・千鳥ヶ池に生息する主な動植物一覧

- 鳥類…カイツブリ・ホシハジロ・カルガモ・マガモ・キンクロハジロ・バン・オオヨシキリ
- 植物…ヒメガマ・マコモ・ヨシ・オニビシ・ミゾコウジュ・カワチシャ
ツクシオオカヤツリ・イヌタヌキモの花
- 昆虫・魚…ショウジョウトンボ・ギンヤンマ・ベニイトトンボ・エサキ・アメンボ・メダカ・カムルチー・フナ

・カヤツリグサは莎草科で三稜形の茎をとって、双方から裂きひろげて蚊帳を釣るに似た四角形をつくることから名がついたと思われる。ハマスゲに似て春生じ冬枯れるが、根には球塊はない。ツクシオオカヤツリグサはこの一種で大型である。茎は三稜形で強靱で高さ1mから1m半を超えるものもある。多年生の草木で地上部は冬期枯死して残骸をそのままとどめている。

『福岡県の名勝・天然記念物』（福岡県教育委員会編）より
西日本文化協会 昭和54年



益村聖福岡県産主要植物図譜(2)から
(1) ツクシオオカヤツリ
1.全形 (1/4×) 2.花序の枝 (×1) 3.小穂 (×5)
4.めしべ (×10) 5.おしべ (×10) 6.果実の全形と横断面 (×10)



千鳥ヶ池にて撮影

参考文献 『福岡県百科事典』1982・11 『古賀町誌』1985・11
『糟屋の昔話』 糟屋地区文化財担当者会編 2000・12